上野公園における公的儀式とその空間形成への影響

Public Ceremonies and its Effect on Spatial Developements of Park, in a Case of Ueno Park

小野良平*
Ryohei ONO

摘要：東京の上野公園は、明治初期に内務省の主導の下、博物館事業や内国勲業博覧会を推進する国家的公園として開設された。本稿では、明治期の国家的イベントとして最も重要である天皇が臨幸した儀礼的行為に着目し、たびたびその会場となった上野公園を対象に明治期の公園の空間構造の形成に及ぼした影響について考察した。現在に至る空間の骨格は明治初期に形成され、はじめに上野に国家的性格を与える儀礼が行われ、つづいて天皇を視覚化して国民に示すという政治的要請が、公園の空間的特性を規定する一要因となったこと等が明らかになった。

1. はじめに

太政官布告に基づいて設置された東京の上野公園に関しては、その誕生前後の複雑な経緯や、博覧会場を主としたイベント空間としての性格等についてこれまでも詳しく研究されている。¹⁾²⁾³⁾ それらも指摘するように、上野公園は太政官制公園の中でも、唯一内務省（のち農商務省、さらに宮内省）の管轄下にあった国家的性格の強い特別な存在であった。事実、博物館事業の展開やそれと連携した内国勲業博覧会などの開催が、現在にいたる上野公園の特質を強く規定づけていることは疑いの余地がない。本稿ではその「国家的性格」をさらに多面的に捉える一視点として、連綿と続く公園事業展開の中にも突出した形で現れた、出来事としての国家的儀礼行為に着目する。特に明治天皇による行幸に代表される公的儀礼行為（表-1）は、それが行われた意味はもちろんのこと、実際の儀式のディテールに至るまでが、近代天皇制の下での「近代の国民」の形成に強く関わっていた事が指摘されている。⁴⁾⁵⁾ それは実際に儀式を演じる器としての都市空間にも形を伴って影響を与えたに違いない。本稿はそのような「政治の空間デザイン」の一端を知るべく、儀式の場としての公園の利用が、その後の公園の地域における位置づけや公園そのものの空間構造の形成にどのような影響を与えたかを上野公園を対象として考察することを目的とする。

2. 上野公園開園式（明治9年）

明治6年に既に公園として決定されていた上野公園に、明治9年5月9日、明治天皇は「開園につき行幸」⁶⁾した。これは明治9年1月に上野公園が紆余曲折の末、内務省の管轄となり博覧会及び博物館事業の道を進み始めたことを受けての行事といえ、国家的性格を考察する上では軽視できない出来事である。この行幸は一般に上野公園の開園式といわれている⁷⁾が、しかし何点かの資料を当たっても、奉迎のための軍楽隊の奏楽程度はみられるものの、「式典」と呼ぶべき儀式が行われた形跡はない。⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾

各資料に若干相違はあるが総合すると、天皇皇后はまず慈眼堂を訪れ茶果で休息し、その後東漸院、徳川將軍の霊廟を巡覧、さらに精養軒に立寄り最後に山王台を降りて皇居に戻っている。（図-1）これらの場所はそれぞれに興味深い。まず慈眼堂は、寛永寺の開祖であり、徳川家康・秀忠・家光の側近として仕えた慈眼大師・天海を祀る寺院である。この天海は、江戸城の鬼門の

艮に叡山を見立てて東叡山寛永寺を興し、同様に裏鬼門に増上寺を移転するなど、いわば宗教空間上のデザインにより、江戸の都市計画に大きく関与した大僧正である。¹¹⁾ 実体としての上野公園の整備はほとんど進んでいなかったが、便殿（行幸の際の仮設休憩所）を設けることもせず、行幸が第一に慈眼堂を目指したことは、単に戊辰戦争で残った建物を休憩所として使用したものとは考えにくい。続いて徳川廟を訪れたことも含め、江戸・徳川の遺した上野という土地の意味に対する何らかの儀礼的意思の表れと見ることができる。明治2年には皇居内紅葉山の徳川廟等が撤去された一方で、¹²⁾ 上野においては徳川廟や東照宮が残されたこと自体もさることながら、天皇がその霊廟を上野訪問の手始めに訪ねたことは、単なる巡覧以上の儀礼であったことを示している。

他の巡覧地点の東漸院、精養軒、山王台はいずれも東、西、南を望む眺望地点である。上野台地から展望可能な全方位を天皇は見渡した。明治元年の天皇の東幸以来、天皇が高台から江戸-東京の町を眺めた記録はこのときまで見られない。¹³⁾ いわばこれは天皇の「国見」行為であった。国見とは古代の儀礼に限られたものではなく、たとえば昭和天皇は、関東大震災後の東京の復興の様子を同じ上野公園の山王台から「御展望」した。¹⁴⁾ 内務省直轄地として博物館等の事業を始めるに当たり、上野の場所性を活かしながらも新たに意味を更新するため、これらの天皇の儀礼行為

図-1 上野公園開園式での巡覧地（明治10年実測図より）

*東京大学大学院農学生命科学研究科

表－１ 明治前半期における天皇の上野公園への行幸及び関連事項年表（文献¹²⁾より作成）

年	月 日	上野公園への行幸	その他関連する行幸	上野公園関連事項	その他関連事項
1868	M 1	10.13	寅幸、東京城着	戊辰戦争	
1872	M 5	5.23-7.12	近畿中国九州行幸	太政官布告(1月) 内務省博物館所蔵(1月) 掛茶屋取払い(2月) 上野公園貸地条例(2月) 精養軒開業(4月)	ウィーン博参加 フィラデルフィア博参加
1873	M 6				
1876	M 9				
		5.9 6.2-7.21	開園 皇后宮御同列、園内巡覧		
1877	M10	8.21 10.26 11.30	第1回内国勲業博覧会 皇后宮御同列会場臨式幸 内国勲業博覧会 皇太后宮、皇后宮御同列巡覧 内国勲業博覧会 皇后宮御同列、閉場式臨御	奥羽巡幸 教育博物館（上野）巡覧(10.20)	西南戦争
1878	M11	4.8	上野公園 桜花御覧	北陸東海巡幸(8.31-11.9)	新博物館起工
1879	M12	8.25	東京府十五区人民の請願によりグラント同伴、行幸	山梨三重及び京都巡幸	大久保利通暗殺 コレラ全国に蔓延
1880	M13	6.16-7.26			
1881	M14	3.1 4.14-20.5.16 6.10 6.17	第2回内国勲業博覧会 開場式 内国勲業博覧会 通覧 内国勲業博覧会 褒章授与式臨御 内国勲業博覧会	博物館竣工 博物館農商務省移管	
1882	M15	3.20 10.24	博物館 閉館式行幸 上野絵画共進会 巡覧	動物園開園	
1883	M16	3.27 5.21	上野水産博覧会 巡覧 動物園 上野水産博覧会 褒章授与式臨御		
1884	M17	11.1	上野共同競馬場落成臨御特旨金五千円を賜ふ	高崎行幸 上野停車場開通式場(6.25) 山陽道巡幸	博物館宮内省移管(M19)
1886	M18	7.26-8.12			
1887	M20	6.7 11.12	上野動物園 御巡覧 華族会館 打撲天覧 上野共同競馬場 競馬天覧		
1889	M22	2.12 4.15	皇后宮御同列憲法発布祝典行幸 華族会館慶應 日本美術協会展覧会	憲法発布式 青山練兵場観兵式(2.11)	大日本帝国憲法発布
1890	M23	3.26 5.16 7.11 7.31	第3回内国勲業博覧会 開会式皇后宮御同列巡覧 不忍競馬場 博覧会出品馬匹天覧 臨時競馬天覧 内国勲業博覧会 褒章授与式臨御 第3回内国勲業博覧会 閉場式各館巡覧		

が必要とされたと考えられる。壇上から勅語を述べるような一般の式典ではなく、公園への入場から出発までの一連の天皇の身体の動きこそが上野公園の「開園式」であった。このように天皇のパフォーマンスを切り取り見ることで上野公園が開園期にどのように国家的性格を獲得していったのかを考察することができる。

この開園式に先がけて公園の馬車道、小憩所等の空間整備が若干行われている。また内務省用地となった直後の明治9年2月に掛茶屋の撤去が行われたことが、博覧会を見込んでの動きであることは既に指摘されているが、¹⁵⁾ 同2月、内務卿の決済によって「上野公園貸地条例」が定められ、¹⁶⁾ 割烹店や小憩所のための貸地が行われたことは掛茶屋の撤去と表裏の関係にある。先の精養軒もこれによって開業している。¹⁷⁾ そして上野公園での貸地代が、他の浅草、芝、深川の三公園の倍近い額であった¹⁸⁾ 事実を考えると、上野公園に内務省が導入しようとした飲食店は庶民を対象としたものではなく、天皇を迎えるに相応しい格の高いものであったことがわかる。出店した店が当時の博物局長、町田久成の肝入りであったという逸話¹⁹⁾ もそれを裏付けるものである。こうして内務省の下で開園した上野公園は、天皇の儀礼を通して、人民輻輳の地としての公園や土地政策としての公園とは異質の、国家の公園として意味付けされ、実際の空間整備もわずかながら始まり、翌明治10年内国勲業博覧会を迎えることになる。

3. 内国勲業博覧会（明治10、14、23年）

旧寛永寺本坊跡を会場として明治10年に開催された第1回内国勲業博覧会に関しては、その会場計画の内外における近代性と非近代性に関して既に分析されているが、²⁰⁾ この博覧会における天皇の儀礼行為、すなわち開場式及び閉場式についても会場の空間を規定した要因として考察する必要がある。開場式の式次第は宮内庁の記録²¹⁾ からしか窺えないが、事務局側が残した閉場式の細かい執行順序²²⁾ と残された錦絵（図－2）などから判断して、開場式も閉場式とほぼ同様の儀式であったと思われる。

馬車による天皇の鹵簿は、儀仗兵の敬礼と軍楽隊の奏楽の中、黒門からまっすぐ馬車道を進み、旧本坊の中門をそのまま使った会場表門を入り、中心の建物である美術館の前面に臨時に設置された式場に到着する。天皇は美術館をバックにした玉座から、大臣、参議、奏任官、外国公使、新聞社員、及び出品人らに向けて勅語を読み上げ、それに対し内務卿及び東京府知事が祝辞を奏上するといった手順である。この開場閉場の式典は、以後第2回、

3回の上野公園における内国勲業博覧会だけでなく、京都（明治28年）、大阪（明治36年）に会場を移してからと同様な形式で続けられている。こうした天皇が臣民の前に開会を宣言する式典の形式は、明治政府が正式参加した明治6年のウィーン万国博覧会における皇帝フランツ・ヨーゼフ1世を戴いた開場式の手順に似通っており、²³⁾ これを手本にしたものと思われる。そしてこの式典の空間計画における重要性は、単に式場が確保されていることではなく、馬車による入場から始まり、門

をくぐって式場まで到達し、会場の中心的建築物である美術館を前に勅語を発するという一連のパフォーマンスの流れそのものが深く関与していることにある。すなわち鹵簿の通行に対応したスケールの馬車道が、会場を正面から貫き、その到達先となる会場奥には、正面性を持って配置された美術館と、その前面に式場の開設可能な庭園的空地が確保されていることが、この儀礼を効果的に遂行するのにふさわしい空間形式の一つであった。これは旧寛永寺の空間構成を受け継いだものともいえるし、上野台地の地形から考えても寛永寺の配置に倣うことが合理的であることは確かである。²⁴⁾ しかしそれは土地の記憶に受動的に引きずられたものだけではなく、儀礼のための空間が会場計画を規定する大きな要因となったことは、京都、大阪の会場計画においても上述の骨格が変わっていないこと²⁵⁾ から判断される。

会場までのアプローチ空間では、例えば第2回博覧会をみると、表門の外には両側に儀仗兵が整列して敬礼し、入口付近には海軍の楽隊も整列をして表門を入るまで奏楽を行う。表門を入ると中門前に整列した陸軍の楽隊が奏楽を始め、さらに中門を入ると宮内省の伶人が奏楽を始めるという演出がなされている。²⁶⁾ このような演出のためには、それぞれの門に分節されながら奥へと入り込んでいくような空間が用意されていることが効果的であり、儀礼の細かい作法すらも、上野公園のこうした空間の構造を規定していく一要因となったのではないかと。

国家による天皇の儀礼行為を意識した空間計画の最も顕著な表れは、美術館（第3回では博物館）とその前面の庭園に見ることができる。内務卿大久保利通は、天皇を戴く近代国家形成のための政治技術として、天皇の可視化の必要性を強く認識していた。それは華々しくパレードを行い、壮麗な宮殿とその前面に広大に展開する庭園でその王権をアピールする、西欧の絶対君主的（ルイ14世がその典型）政治技術に近い、²⁷⁾ という考え方を援用するなら、上野の博覧会場の美術館と前面の整形的な庭園こそが、天皇を視覚化する儀礼の舞台道具であったといえる。（図－3）第1回の会場計画が、稚拙ながらもその意図を最も良く示しており、公式ガイドに載せられた会場の鳥瞰図²⁸⁾ が銅版画で西欧風に描かれたことは、来場者はむしろ国内外に、メディアを通して天皇の力を誇示しようとする技術であったといえる。そこに天皇を直接示す記号はないにも関わらず、儀礼を執り行う天皇を可視化し、さらに逆に世界を睥睨する天皇の視線を生み出すことが、現実のプラン及びその広報の双方で行われたのである。

しかしもちろん、これらの儀礼のみが会場計画を規定したわけではない。例えば先のウィーン万博参加の報告書の中で、1851年のロンドン万博に関与した建築家による博覧会造営の方法書というべきものの翻訳が載せられている。²⁹⁾つまり既に博覧会のための参照すべき空間計画論があったことも確かで、そこには例えば会場内の「洞見」を確保すること等が、看客（来観客）のための機能論などから記されている。このような天皇の儀礼に直接には関わらない具体的計画論や博覧会当局の計画意図³⁰⁾等も含めた、総合的なものが会場計画には反映されていたと思われる。

4. 明治12年の行幸（グラント将軍歓迎式）

第1回博覧会の翌年の明治11年4月には、天皇は観桜のため上野公園を訪れているが、このときは精養軒で的高官達との午餐以外の記録はない。³¹⁾次に重要なイベントとなったのが一般にグラント将軍歓迎会（図-4）と呼ばれている明治12年8月25日の行幸である。この行幸は元々同年7月に、東京府会、十五の區会、商法会議所の代表が名を連ねて下から請願を行い、これに天皇が応じたという経緯で行われたものである。この請願者の代表は東京府会の議長、福地源一郎（桜痴）及び商法会議所会頭、渋沢栄一らであった。その内容は、明治5年から既に行われていた地方巡幸について触れ、

（前略）然ルニ反テ帝都ニ住ミシ、皇居ニ咫尺シ、奉ルノ東京府下十五區ノ人民ニ至リテハ、十二年ノ久ヲ経ルモ未タ徳ニ府民ノ為ニ御臨幸ヲ賜ハリタルノ盛舉ニ値ハサルハ、抑モ府民ノ會テ是ヲ請願シ奉ラサルノ故ナリト雖モ（中略）幸ニ今国家無事、府民皆鼓腹擊壤ノ太平ヲ樂ムノ明時ニ遭フヲ以テ畏クモ聖上陛下御政務ノ御暇ヲ窺イ奉リ、御臨幸ヲ上野公園ニ恭クシ、弓馬槍劍ノ武伎及ビ狼烟烟火等ヲ天覧ニ供シ、以テ歡慮ヲ慰メ奉ランコトヲ請願ス。（後略）³²⁾

というものだった。天皇の地方巡幸とは、明治5年から18年にかけて6回行われ、明治前半の不安定な政情の中で、生身の上野公園を民衆に見せることで天皇の存在を知らしめ、意識下に権力を行使して支配を強化する政治的儀式であった。³³⁾上の請願は、お膝下の東京府民が未だそのような天皇の威光にあずかれていないことからの要望ということになる。

請願の行われた7月当時、全国的にコレラが流行っており、上野公園への行幸は秋の涼しい時期に行いたい、というのが当局の意向であったようだが、結局は8月に実施された。その理由は記録には明記されていないが、当時7月から8月にかけて来日中であっ

たグラント将軍（元米大統領）の滞在日程に合わせたものと考えられる。その仕掛け役は福地である可能性が高い。福地は明治3年に伊藤博文（明治11年より内務卿）と渡米し当時のグラント大統領に謁見したほか豊富な海外経験を持ち、今回のグラント将軍の来日にも重要なホスト役を務めていた。³⁴⁾既に将軍の歓迎会や天皇との会見は行われていたが、天皇の東京府民に向けての「巡幸」とそれを海外の眼にも知らしめるという一大イベントを福地らは企画したのである。

行幸は、当時仮の皇居となっていた青山御所から、四谷、半蔵門、桜田門、幸橋、新橋、銀座、京橋、日本橋、から萬世橋を渡り、御成街道を進んで広小路から上野公園に入るという道順であった。最短ルートを使わずに銀座通りなどを取り込んだ、パレードそのものに重点が置かれたルート設定であることは、先の福地らの請願文から推して知ることができる。また公園には80歳以上の老人を招待するなど、明治元年に天皇が京都から東幸した際と同じような³⁵⁾振舞いが見られ、この明治12年の行幸が、地方巡幸と同じような意義を持って実際に行われたことがわかる。上野公園は、そのパレードの「上がり」として、外国要人の歓迎の場を越えて、天皇を視覚化する重要な儀礼の会場としてここでも位置づけられた。こうした開園式、博覧会から続く一連の儀礼的行為によって、帝都たる東京における上野公園の国家的性格が決定的なものとなったのではないだろうか。ここで見過ごせないのは、形式的にせよ下からの請願に基づいた天皇の恩寵という手段を選んだことで、これは明治政府が求めている主体的存在としての国民³⁶⁾、を演じさせる場を設けたということでもある。

公園内では中堂跡を会場として玉座や貴賓席が設けられ、そこで槍劍術や流鏑馬などの武術の天覧があった。その背後では、本坊跡（博覧会場跡）で新しい博物館の建設が始まっており、この天覧は、先に述べた西欧型宮廷の庭園として公園を見立てた、博物館の「前庭」での一大ページェントであったといえる。それは空間的には第1回博覧会の美術館と庭園との関係をさらに拡大させたもので、この構成が基本的には現在に続いている。

5. 天皇の空間の系譜 以上のように、明治前期の上野公園に関連した天皇の儀礼行為は、公園の空間に強い影響を残したが、それが継承されていく姿を追ってみる。パレードの目的地としての上野公園の国家的性格は、明治22年の大日本帝国憲法発布の祝典での、銀座通りからの行幸によって頂点に達した。下って明治34年に上野公園の管理者であった博物館は、公園がなお乱雑な

図-3 第1回博覧会における儀礼的空間

図-2 『内国勲業博覧会開場御式之図』橋本直義、明治10年

図-4 『上野公園地ニ於テ米國前ノ大統領グラント氏鎗術遊覧図』古林栄成、明治12年

様子を呈していたため、上野公園修理調査委員会を設け、35年に報告を行っている。改修項目の一つとして、

「第四：三号館五号館ヲ移転シタル上ハ竹ノ台全部ヲ修理裝飾シテ之ヲ雄大宏闊ノ庭園トナシ中央ニ一道路ヲ通シソノ左右ノ広場ニ奏樂堂各一個ヲ建設スル事」³⁷⁾としている。竹の台は中堂跡で、グラント將軍歓迎式が行われ、その後博覧会時には中心的会場となっていた場所である。ここで博物館と前庭の関係ははっきりと明文化されることとなった。

特に興味深いのはこの委員会に内匠寮技師の福羽逸人が関わっていたことである。福羽は明治33年のパリ博に参加して新宿植物御苑の改造設計を仏造園家に依頼し、自らは明治36年の第5回内国博の庭園を担当する身であった。その双方で、彼は御苑の宮殿（実現せず）と博覧会の美術館前に展開する壮麗な造園計画を立てており、これが大正期に彼の後継者の折下吉延によって、明治神宮外苑に代表されるヴィスタを取り入れた景観設計として大成されていく。同時期に福羽が上野公園にも関わっていた事実から、この造園デザインの系譜³⁸⁾の源流には、天皇の儀礼空間としての上野公園の空間が、その一脈をなしていたことがわかる。

さらに大正13年に上野公園は宮内省から東京市へ下付されたが、そのときの条件の一つとして

「4. 博物館前指定ノ区域ニハ建築物ヲ建設セザルコト。博物館近接ノ地域内ニハ可燃性建築物ヲ建設セザルコト。」³⁷⁾としている。条件の一つが第1回博覧会に始まる博物館と前庭の関係を後世に存続させることにあり、天皇を戴く「国家」により形作られ

た空間が「下付」されたことがわかる。そして震災後の新博物館のコンペ（昭和5年）や、³⁷⁾ 戦後になっても竹の台の噴水の整備（昭和35年）、東京文化会館（昭和36年）などは³⁹⁾ すべてこの条件に則り現在のの上野公園に至っている。

5. おわりに

以上、天皇の儀礼を通して、上野公園の空間の形成の過程を分析した。最初の開園式では、徳川の遺産である上野の場所性を更新するための儀礼が天皇により行われた。続けて開かれた内国勸業博覧会では、天皇の力を可視化する儀礼とそれに応じた空間が実現され、その意思が明治12年の行幸に置いてさらに強化され、パレードの空間と、西欧宮廷風の建築及び前庭の構成からなる、現在につながる空間の基本骨格が形成された。

しかしこれらの儀礼の風景に、民衆の姿としてはパレードの沿道に群がる人影しか見ることができない。明治22年の憲法発布の祝典の際も、上野公園自体は華族や議員らのために使用されただけで、民衆はただ沿道から聖容を仰ぐのみであった。⁴⁰⁾ 公園が民衆の参集する祝典、イベント等の儀礼の場となるのは、明治27年の日清戦争祝捷会辺りからであるが、このころから民衆の儀礼の姿が、明治20年代以降に帝都の整備とともに登場してきた宮城外苑（明治21年から整備）や日比谷公園（明治36年）に現れてくる。これは形式的にも立憲君主制が確立してきたことや、明治前半期の巡幸という天皇の儀礼の形態の変化、あるいは天皇と国民の間の視線の関係の変容⁴¹⁾等とも関わりのあることと考えられる。

補注及び参考文献

1) 小寺駿吉(1944): 上野恩賜公園－特に明治文化史上に於けるその位置－: 公園史と風景論, 小寺駿吉論文集 pp32-40	14) 東京市役所(1932): 帝都復興祭志 53(5), pp73-78, なお京都、大阪では式場は常設の施設になっている。
2) 田中正大(1974): 日本の公園: 鹿島出版会	15) 前掲書3), p131
3) 吉見俊哉(1987): 都市のドラマトゥルギー, pp127-133, 弘文堂	16) 東京国立博物館(1973): 東京国立博物館百年史, p200: 東京国立博物館
4) 多木浩二(1988): 天皇の肖像: 岩波書店	17) 東京市役所(1932): 東京市史稿, 遊園篇, 第四: p883に, 許可を受けた者として精養軒の北村重禮の名がある。
5) T・フジタニ(1994): 天皇のページェント, 240pp: 日本放送出版協会	18) 前嶋康彦(1960)東京公園史話 14: 都市公園 23, pp25-29
6) 宮内庁(1969): 明治天皇紀 第三 pp598-599: 吉川弘文館	19) 上野の杜事典編集会議(1995): 上野のお山を読む, p97: 谷根千工房
7) 丸山撰一(1996): 上野公園開園式典 120周年事業: 都市公園 No.134	20) 小野良平(1996): 明治初期の内国勸業博覧会における会場デザインの思想: ランドスケープ研究 59(5), pp25-28
8) 『東京日々新聞』明治九年五月十日	21) 宮内庁(1970): 明治天皇紀 第四, pp239-242: 吉川弘文館
9) 『東京曙新聞』明治九年五月十日	22) 明治十年内国勸業博覧会規則帖
10) 『郵便報知新聞』明治九年五月十日	23) 田中芳男, 平山成信(1897): 渙國博覧會参同紀要, pp37-39, 式は会場中央大ドームで行われ, 美術館等はない。
11) 宮元健次: 江戸の都市計画: 講談社	24) 田中正大(1996): 上野公園の空間 構造: 上野公園ものがたり, pp52-61: (財)東京都公園協会
12) 東京市役所(1916): 東京市史稿, 皇城篇, 第四: pp166-186	25) 小野良平(1991): 震災復興期に至る公園設計の史的展開について: 造園雑誌
13) 矢吹活禪(1933) 明治天皇行幸年表: 聖文閣	26) 農商務省(1883)第二回内国勸業博覧会報告書, pp7-13
	27) 前掲書4), pp6-10
	28) 明治十年内国勸業博覧会場案内: 内国勸業博覧会事務局, 1877
	29) 富田淳久訳(1875): 博覧会場建築比較論: 渙國博覧会報告書博覧会部下 p46
	30) 前掲論文 20)
	31) 前掲書 21)
	32) 東京市役所(1933): 東京市史稿, 遊園篇, 第五, pp261-293
	33) 前掲書4), p80
	34) 小山文雄(1984): 明治の異才福地桜痴, pp100-106: 中央公論社
	35) 前掲書4), p27
	36) 前掲書5), p26
	37) 前掲書16), pp372-483
	38) 前掲論文 25)
	39) 小林安茂(1980): 上野公園, pp91-94: 郷学舎
	40) 遠山茂樹(1991): 明治維新と天皇, pp245-246: 岩波書店
	41) 前掲書4), pp75-89

Summary : In early Meiji, under the control of the Department of the Interior, Ueno Park (in Tokyo) was opened as a 'national' park which promote the national museum and national exhibition. And Government held lots of national ceremonies at Ueno Park. This study aims to reveal the effects of public ceremonies, especially the pageants of Emperor, on spatial developments of parks in Meiji era. It is cleared that a spatial frame of Ueno Park was established in early Meiji. First, Emperor's ceremony renewed the national characteristics of Ueno district. Then, under a political necessity of visualization of Emperor for nation people, the Ueno Park was designed as a road for pageant and a palace-like garden.